

開催地名	： 富山県砺波市
開催日時	令和3年12月10日（金曜） 19：00 ～ 20：30
開催場所	砺波市庄川生涯学習センター 1階ホール
語り部	平澤 つぎ子 （千葉県旭市）
参加者	市危機管理課、市民、防災士・防災団関係機関 100名
開催経緯	日本全国で地震や土砂災害などが多く発生している今、自分の地域は大丈夫と思わず、実際の災害に合う前に防災意識の向上に努めてもらう事を目的に講演会を実施することにした。
内容	<p>(1) 自然災害の特徴</p> <p>自然災害は「大雨・台風」「雪害」「火山噴火」「地震」「氾濫・洪水」「高潮・津波」「土砂災害」に分かれる。中でも予報が出るものは対策ができるが、特に予報のできない「地震」はどうしたら良いのか。時、場所、人を選ばず命にかかわる恐怖がある。</p> <p>(2) 東日本大震災発生時の旭市の状況</p> <p>東日本大震災発生の影響で、旭市にも甚大な被害があった。2回の地震発生により、民家の裏山が約100mにわたり崖崩れが起り、道路は液状化現象で波打った。市では地震発生後10ヶ所ある避難所への避難を指示した。1回目の地震発生約30分後に2回目の地震が発生し、その約30分後に第一波の津波が襲ってきた。2回目の地震から約1時間後に2～3mの第二波の津波が襲い、その後約7mに及ぶ津波で多くの人々が流されてしまった。</p> <p>(3) 避難所の状況について</p> <p>自分のいた避難所には約3,000人が避難してきた。津波で濡れたままの衣服、泥だらけの履物で避難所ではトラブルも多く発生した。避難所は1人分のスペースが狭く、いつでも誰もが出入り自由で、プライバシーの保持や精神的な休息が困難だった。寝食は同一場所なので周囲が汚れがちになり、断水や大量のごみによる悪臭、異臭、害虫が発生した。食料や水、寝具などの救援物資が十分でなく、入浴や清拭、更衣などの不自由さ清潔保持の困難があった。トイレの設備上の不自由さや使用困難など、特に女性や高齢者は、着替える場所、子供の泣き声や他人のいびき、老若男女が混在し、経済的なことや家族の話もできない。精神疾患、持病、結核、その他感染症の人が隣にくることもあるなど避難所生活で抱く不安や悩みが多くでた。</p> <p>地震発生時の3月12日～5月21日の間、食事関係（おやつ、昼食の配膳、夕食の下準備）、保健衛生面（掃除、窓の開閉、ごみの始末、体調の観察）、心のケアとして傾聴、話し相手、相談なども行っていた。その他にホットタオルの</p>

配布、生け花、依頼されたことなどを臨機応変な活動を行ってきた。色々な活動を行っている中で、避難している高齢の漁師からの差し入れや、中学生からの声掛けや挨拶などで、心の繋がる感じがとても嬉しく感じていた。天皇陛下の訪問で優しい言葉を掛けられ元気が出た避難者も多くいた。

#### (4) 参加者に伝えたいこと

震災から10年が経過し、振り返ってみると色々なことがあった。国・県・市では3,000本の植樹や防潮堤、避難タワー、復興住宅、防災資料館、緊急機内所の建設整備が行われ、地元住民は復興かわら版、冊子の製作、語り部、復興どんぶり、福幸弁当、防災教育など住民の底力・パワーを出してきた。言葉の力に注目し、防災教室、紙芝居の作成、復興女性三人歌集、各種イベントなど、体験を共有し震災の教訓を後世に残していきたいと考えている。日本ではどこでも地震が起きており、予報・予知は難しく、地震が起きない場所はないと感じている。正常性バイアスという意識を持たず、備蓄品、持ち出し品、家の中部屋の家具の固定など今一度備えを見直して欲しい。阪神・淡路大震災発生では誰に助けられたかという、自力、家族、友人・近隣で95%を占めており、公助ではなかった。自助、緊急時に備えた平時の研修、訓練、情報共有など、地元・町内・向こう3軒両隣で日頃の付き合いをする。身近なことでは、車のガソリンはメーターが半分になったら入れておくことや、備蓄品の確認は1年に1回、月日を決めてチェックする。そして連絡網の確認、スマホの充電をしておくなど日頃からの心がけ、自分たちの地域は自分たちで守る自主防衛組織の必要性が大事である。最後に「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉があるが、今は「天災は忘れないうちにやってくる」「忘れてもやってくる」。ものの準備をしておくことが重要だ。

「備えあれば憂いなし」という当たり前の言葉だが、しみじみと災害にあって感じたので、これから準備される皆様にお伝えをしたい。



開催地より

避難所の活動が非常に大切だという事を感じた。またいつ災害が起きるかどうかわからない今の日本で、災害に備える必要性を身に染みて考えさせられる機会を与えていただいた事に感謝します。とても勉強になりました。